

不登校復帰モデルプログラム

提 言

長期研修員 齋藤 亮一
指導主事 住谷 孝明

1 提言

組織的「チーム援助」による共有問題解決思考の取組と浸透が有効

「学校が動く、適応指導教室が動く、親が動く、そして、子どもが動く」

2 提言の実践に向けた基本的な考え方

不登校、及び、不登校傾向の児童生徒のシグナルを素早くつかみ、かかわれる人や機関が連携を組み、援助チームを組織し、児童生徒の社会的自立に向け、それぞれの特性を生かして支援に動く。学校、適応指導教室、家庭等がチームを組織し、計画的にチーム援助会議を持ち、それぞれの特性を生かし、児童生徒の情報を共有しながら、組織的に支援を図る。援助者が、児童生徒との活動を共有し、思いや願いをつかむことにより、問題解決を共有する意識が高まり、課題が共有化され、多面的な理解と多様な支援を図ることができるようになる。この多様な支援が、児童生徒の社会的自立を促進する。

言葉や行動に表れなくても、不登校の児童生徒（子ども）は、潜在的には人との関わりを持つことを求めている。社会的自立を求めている。その思いや願いの実現へ向けた取組や心の動きを「子どもが動く」と捉えた。私たちは、言葉や行動など直接的な表現でない部分からも、メッセージをつかみ取ることができる。共有する不登校問題は、児童生徒本人だけでなく、保護者、学校（教師）にも解決が迫られている。大切なことは、児童生徒が社会的自立へ向けて変容することである。この「動く」は、目に見え、表に出る行動のみを示すものではない。表に行動として見える動きもあれば、表には出ずに、児童生徒の心の動きとしての変容もある。「動く」ためには、問題解決を共有する主体者が、それぞれ、どのように、資源を活用し、連携を組んで、組織的に見通しを持った具体的な援助をするかが重要になってくる。援助者が、バラバラな動きをするのではなく、組織的に児童生徒と問題解決を共有しながら取り組む視点で、「動く」ことが大切である（図1）。

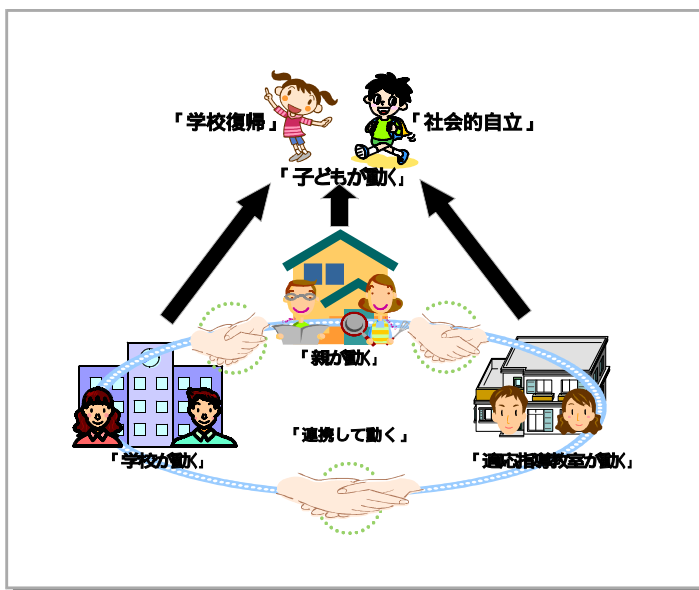


図1 組織的「チーム援助」概念図

(1) 不登校の捉え方

不登校問題は、児童生徒、家庭（家族）、学校等が共有する解決すべき問題

不登校問題は、その児童生徒のみ
の問題ではない。問題は、その児童
生徒や家庭（家族）と学校（社会）
の間に位置する解決すべき共有の問
題である（図2）。適応指導教室は、
この問題解決に加わり、連携を取り
ながら、子どもを支援するものである。
学校、適応指導教室、家庭の動きが、
協働態勢と成り、相互コミュニケーション
が展開されたとき、児童生徒
が一步動き出すための素地ができる。

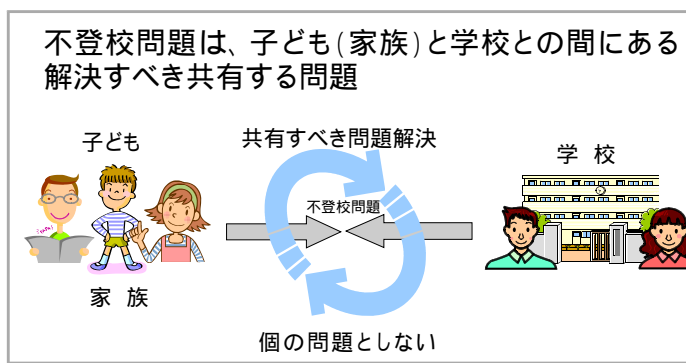


図2 互いに共有すべき問題解決

(2) 組織的チーム援助

立場の違う援助者が連携し、それぞれの特性を生かして取り組むチーム援助が有効

立場の違う援助者が共通目標に向
かって集い、児童生徒の多面的、総
合的なアセスメント（以下、「総合
的なアセスメント」）を図り、連携し、
共有場面を持ち、それぞれの特性を
生かした多様な介入を行い、総合的
に評価、修正、実践していくことが
効果的である（図3）。この復帰を
目指した問題解決思考による機能的、
効果的なチーム援助による取組を「
組織的チーム援助」と捉える。

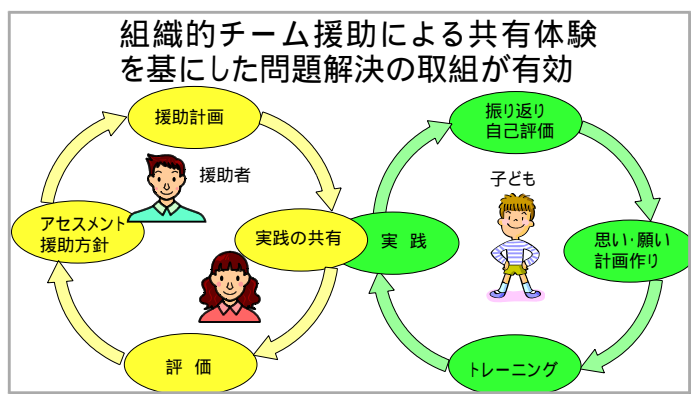


図3 共有の場を持つ円環的な問題解決

(3) 問題解決プログラム

児童生徒と共有体験を基にした円環的な共有問題解決思考の広がりが解決の鍵

児童生徒と問題解決を共有してい
く取組は、そこで得られた情報を基
に総合的にアセスメントを深めてい
くことに有効であり、次なる活動を
柔軟に再構成していくことができる。
必要な情報は、外部から入ることを
待つのではなく、積極的に円環的な
問題解決の中に取り込んで、再構成
していくことが重要である（図4）。

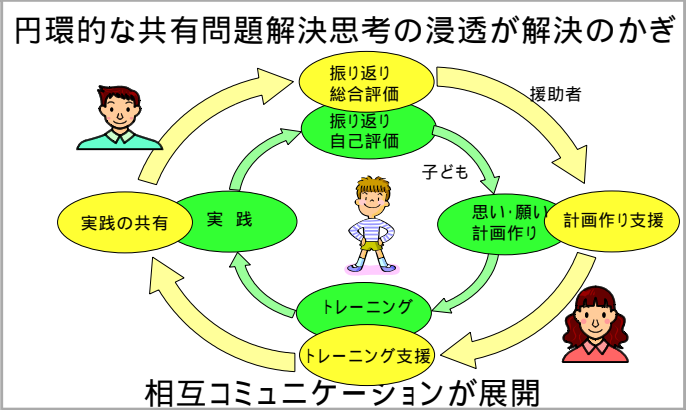


図4 共有問題解決思考の展開

3 「動く」ことについて

(1) 「動く」まで

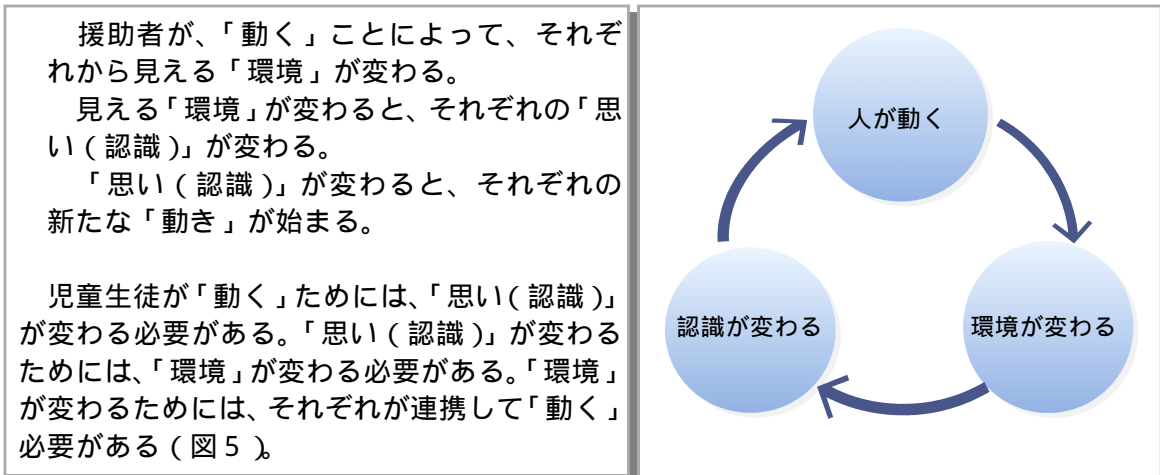


図5 「動く」ことへのサイクル

(2) 連携する協働態勢

共通目標に向かって立場の違う援助者が集う。児童生徒の総合的なアセスメントを図るよう連携する。それぞれ援助者の特性を生かした多様な介入をタイミングよく行うとともに、多面的な評価・検討をし、修正しながら実践していくことが有効である。このような取組を目指す組織的「チーム援助」が、児童生徒の復帰へ向け、機能的、効果的に展開する。

(3) 「動く」ための羅針盤

不登校問題の特性として、多様で流動的である一面を持っている。解決に向けての柔軟なプログラムを生み出す共有すべき問題解決思考が必要である。解決に向け、問題の共有者が、児童生徒のために動こうとする取組から始まるのである。援助者は、児童生徒の「計画作り」「トレーニング」「実践」「自己評価」の場面で、意図的に共有場面を持つことが重要である。この児童生徒と問題解決を共有していく取組は、その都度得られた児童生徒のアセスメントを理解することで、次の活動を再構成していくのである(図6)。

(4) 援助者が「動く」とは、

児童生徒の復帰へ向け、援助者が児童生徒と共有体験を持ち、また、持とうと取り組み、共有の問題解決思考でアセスメントを図り、プログラムを考え、問題解決に向け、最善と思われる何らかの行動を起こす一歩を援助者の「動く」と捉える(資料1)。

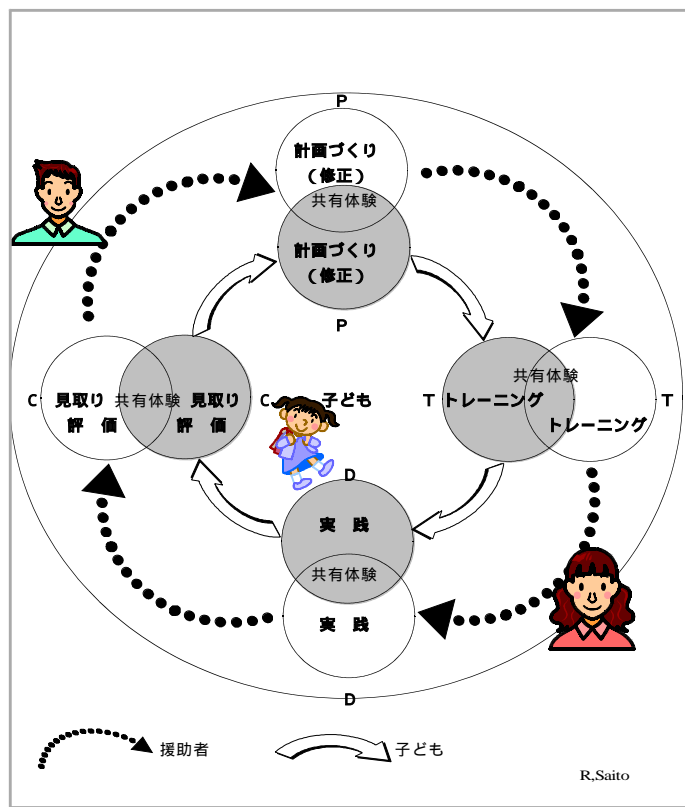


図6 共有問題解決モデル

(5) 援助者の「動く」

- 動く 多面的にアセスメントを進め、児童生徒も周囲の環境の影響を受けて変容する存在である認識を持つ。
- 動く 児童生徒の思いや願いをつかむことは、効果的な援助を実施する基礎となる。
- 動く 援助チームを編成して、児童生徒の達成目標の共通理解を図る。
- 動く 援助者と児童生徒の取組が共有する円環的問題解決となると、相互コミュニケーションが展開され、課題の共有がなされる。
- 動く チーム援助の取組により、適時性をつかみ、登校のきっかけとなる具体的な手立てのアプローチをする。
- 動く 児童生徒の変容をつかみ、評価・検討することにより、目標（方針）手だて等を柔軟に修正して取り組む。

4 効果的に「動く」ための援助ポイント（視点）

「動く」四つの視点

- T timing (流動的であり、アセスメントや対応の適時性が大切)
 - E environment (復帰を促す環境整備が大切)
 - A approach (登校へ向けて適切な登校刺激となるきっかけが大切)
 - M message (子どものメッセージをつかみ、メッセージを送り続けることが大切)
- 「TEAM」 チーム援助（協働態勢の動き）

5 不登校復帰モデルプログラム構想図

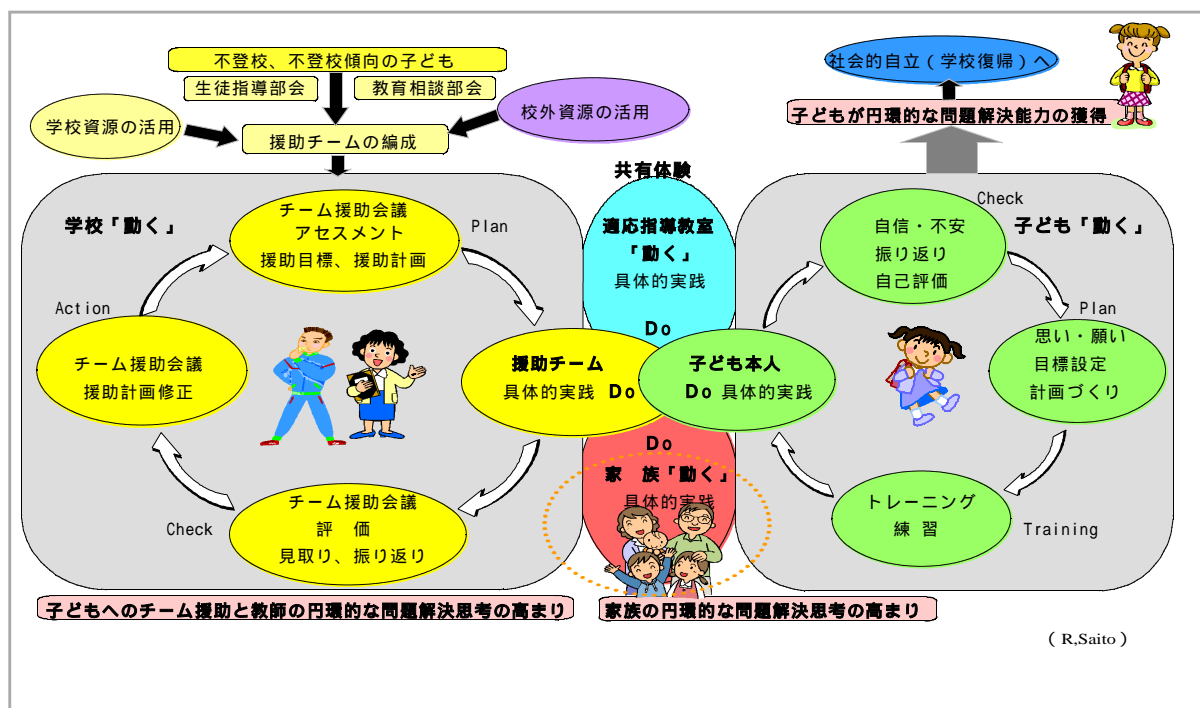


図7 チーム援助で各々が「動く」ことによる児童生徒と共有体験を軸にした問題解決モデル

6 学校、適応指導教室、家庭等が連携した「組織的チーム援助全体モデル」

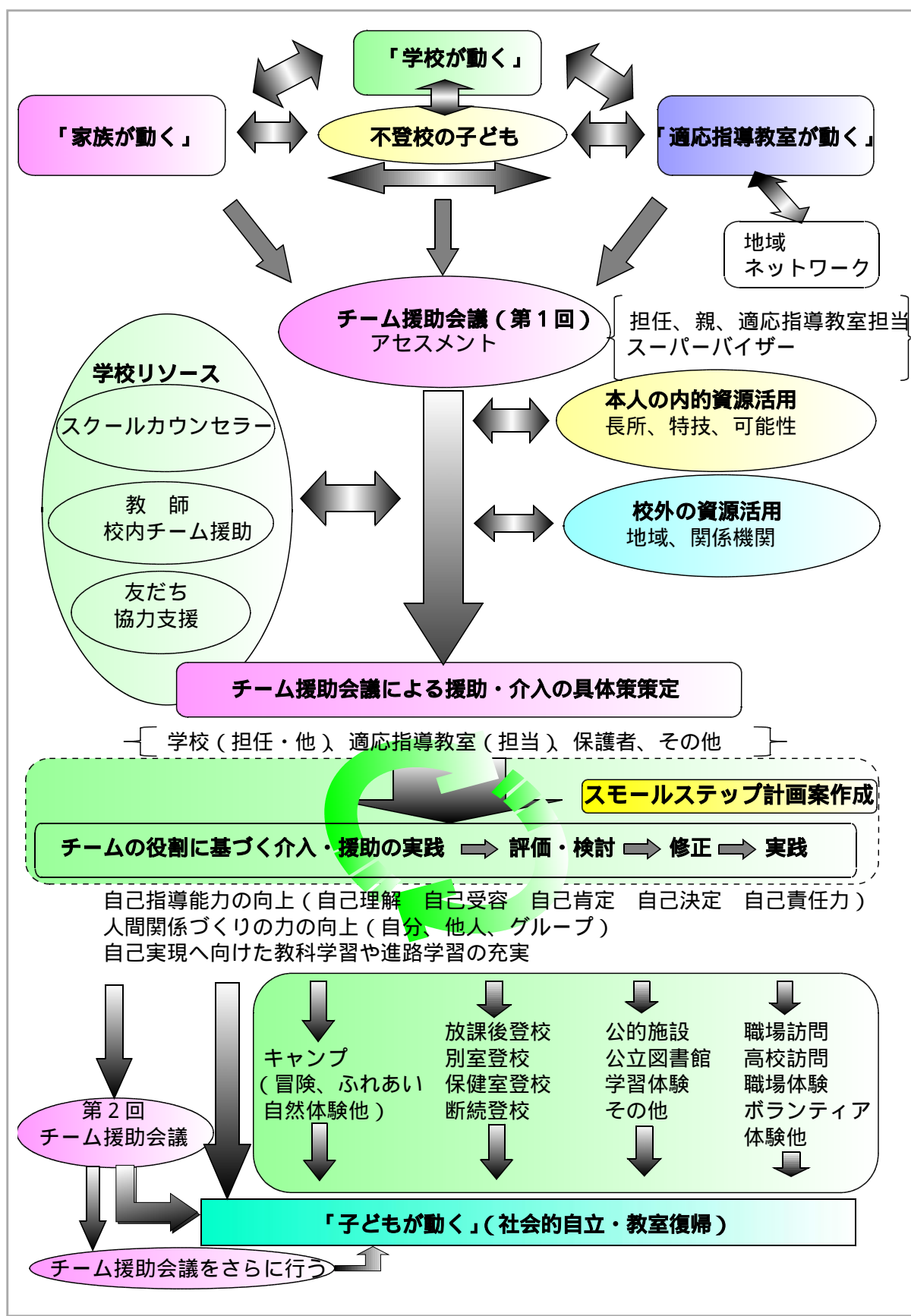


図8 「連携チーム援助」全体モデル

《不登校復帰「チーム援助」展開モデル》

不登校や不登校傾向の児童生徒を見出す。

ア 担任は、すぐに、学年主任、生徒指導主事（任）、校長、教頭に報告する。

イ 職員会議、生徒指導部会、学年会で知らせ、周知徹底する。

生徒指導主事（生徒指導主任、教育相談主任、不登校担当）が中心となって、対象の児童生徒のアセスメント会議を開く。

ア 担任を中心に、児童生徒のアセスメントを行い、問題を共有する。

イ 児童生徒の援助へ向けたコーディネーターと援助チームの構成員を選定する。

コーディネーターを中心に、対象の児童生徒の援助チームを編成する。

ア 児童生徒の様子を話し、援助チームの成員として依頼する。

イ 援助チームの成員に、召集をかけ、チーム援助会議を開く。

第1回チーム援助会議を開く。

ア 担任を中心に、児童生徒のアセスメントを行い、状況を把握し、問題を共有する。

イ 援助チームにより、「チーム援助シート」（9頁資料1）を作成し、本人や保護者の思いや願いを配慮しながら、援助者が共通認識を持つようにする。

ウ チーム援助会議を重ねながら、a援助目標を決め、b援助方針、c援助計画立案、d役割分担を決める。

エ ウで決まったことを基に、児童生徒の到達目標達成に向け、スモールステップ計画案を作成し、明確な手だてと役割分担、具体的援助案を策定する。

オ 適応指導教室等、外部機関との連携も検討する。

カ 次回、チーム援助会議の開催日を決める。

援助チーム構成員は、対象の児童生徒の情報を収集し、変容を多面的につかむ。

ア 担任は、家庭訪問を実施し、児童生徒や親とのラポールづくりに努める。

イ 担任は、児童生徒、親の思いをつかみ、願いをかなえるように努める。

ウ 担任は、児童生徒を迎える学級風土づくりに取り組む。

エ 各職員は、児童生徒を迎える学年風土、学校風土づくりに取り組む。

第2回チーム援助会議を開く。

ア a 援助目標、b 援助方針、c 援助計画、d 具体的援助方法と内容を決め、共通理解を深めていく。

イ 援助チーム構成員の取組と児童生徒の変容を明らかにし、共通理解を深める。

ウ 長期的な展望を持ち、短いスパンで、児童生徒へ具体的な援助案を確認する。

エ スモールステップの観点で、援助全般、構成員の対応を振り返り、評価・検討する。

オ 評価・検討を踏まえ、次の取組を策定し、確認、実践する。

カ 適応指導教室との連携も視野に入れて検討する。

チーム構成員による援助案の役割内容に沿った具体的実践を進める。

第3回チーム援助会議以降、 の確認を進め、状況を検討する。

問題の改善が困難な場合は、外部からスーパーバイザーを交えチーム援助会議を行う。

以降、繰り返し、柔軟に対応していく。

《不登校復帰「チーム援助会議」展開モデル》

出席者：保護者、学級担任（学校）、適応指導教室指導者、コーディネーター

会議の期日や会場の設定に当たって

- ・ コーディネーターが、連絡調整し、期日や会場を設定する。

会議の期日、時間の設定

- ・ チーム構成員の全員が、参加可能な日時を設定する。不参加者がいては、チームの特性が発揮できない。そこで、全員参加を前提とし、期日と時間を設定する。
- ・ 出席者が、全員集い、落ち着いた環境の中で会議が持てるように配慮し、期日と時間を設定する。

会議の会場の設定

- ・ 状況に応じて会場を確保する。可能であれば、適応指導教室で実施できると保護者も比較的出席しやすく、継続が可能と考える。また、対象児童生徒も安心すると考える。

第1回チーム援助会議の進行

コーディネーターより挨拶。

- ・ 継続的な会議の可能性も考慮し、会議の終了時間を最初に伝え、時間を守る。

自己紹介

- ・ 会議の内容は、慎重なものである。しかし、チーム援助会議では、話し合いが活発に行われるよう和やかな雰囲気となるような時間としたい。参加する保護者の気持ちを配慮することが、重要である。

コーディネーターよりチーム援助会議のねらいと特性、有効性、進め方等説明する。

対象児童生徒についてのアセスメント（慎重を期すために、初回の会議で全て決めるのではなく、第2回以降の会議を通して、以降の項目の構成員の共通理解を目指す。）

援助目標（方針）の検討

具体的援助内容の検討

援助実践の役割の検討

～ の確認をし、次回までのそれぞれの取組の共通理解を深める。

次回会議の期日と会場、協議事項を確認し閉会する。

第2回以降のチーム援助会議の進行

9 組織的チーム援助の具体的な取組

(1) 学校、適応指導教室、家族等による連携した「チーム援助」の組織作りと展開

生徒指導、教育相談部会において、不登校児童生徒のアセスメントを行い、学校内外の資源に目を向け、問題解決へ向けて必要な構成員による社会的自立を目標とするチーム編成する。このチームは、援助していく過程で、必要に応じて、メンバーを改変する弾力性を持たせる。

基本的な援助チームの構成員は、担任、適応指導教室担当、保護者、コーディネーターの四者と捉える。しかし、学校において会議を持つ場合は、必要に応じて、保護者は、必ずしもチーム全員同席のところ

で話し合うのではなく、要望により、担任や適応指導教室担当、コーディネーターと個別に相談の機会の設定も有効と考えられる。柔軟に四者、三者、二者相談等考えられる。コーディネーターは、生徒指導、教育相談部会で、適切と判断された人が当たる。一般的に、対外的な連携を踏まえると生徒指導主事（任）が適任と考えるが、実務的には、学年主任が動きやすいと考える。

図9で示すように、児童生徒の実態に沿い、チーム援助により、「アセスメント」「スモールステップ援助案立案」「具体的援助実践」「変容と鳥区の評価・検討」「修正援助案立案、実践」という円環的な取組を目標に向けて展開する。

(2) 「チーム援助シート」と『個人記録』ファイルの効果的な運用

担任が中心となって、援助記録ファイルを作成する。チーム援助会議を重ねることを通して、児童生徒にとって適切な「チーム援助シート」を作成する。そして、「個人記録ファイル」としてチーム構成員が閲覧できるよう、取り扱いにも注意しながら管理箇所を決める。

会議において、確認した援助目標（方針）や具体的援助内容と役割分担を「チーム援助シート」に明記する。チーム援助会議において、「チーム援助シート」を、援助者が書き足していき、「個人記録ファイル」を充実させ、児童生徒の変容がつかみやすいようにしていく。

チーム援助会議は、全員参加が原則である。なぜならば、それぞれ立場の違う援助者が多面的にアセスメントを図り、多様な介入ができることを一つの特性としているからである。しかし、立場の違う援助者が一同に会する機会を定期的に維持していくことは、容易なことではない。そこで、「チーム援助記録シート」作成の目的である児童生徒のアセスメントや変容、共通理解、記録保存等の目的等も踏まえ、チーム援助会議の協議・検討時間を最大限確保すること、援助者が継続的に取り組みやすいよう、既存の「チーム援助シート」（石隈・田村式）を改変した（次頁資料1）。さらに、不登校の児童生徒への組織的なチーム援助が円滑にできるよう記載の仕方、活用の仕方を工夫した。

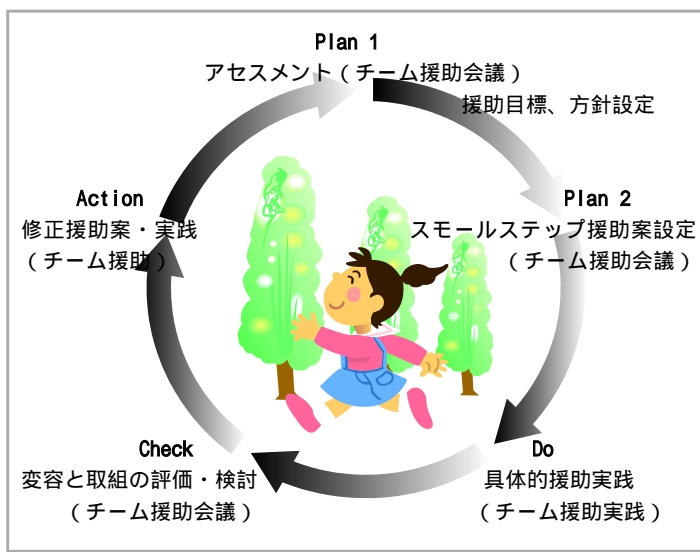


図9 復帰を目指すチーム援助の円環的な問題解決

「個人記録」ファイル【チーム援助シート】

「学校が動く、適応指導教室が動く、親が動く、そして、子どもが動く」

氏名	第 回チーム援助会議 平成 年 月 日()			
	(第 学年 男子・女子)	援助チーム構成員	学級担任() 親()	
学級担任 ()	コーディネーター	生徒指導主事()	養護教諭(又はSC)()	
適応指導教室指導員 ()		適応指導教室指導員()		
情報	概要 【見立ての主体】	援助目標 (方針)	援助案：活動主体 【役割分担】	変容記録、評価 月 日
本人	心理・ 社会面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 。【家】 ・ 。【学校】 ・ 。【家・学校】 ・ 。【学校】 ・ 。【適応指導教室】 ・ 。【適応・家】 		
	進路・ 学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 。【学校】 ・ 。【家】 ・ 。【適応】 		
	健康・ 他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 。【家】 ・ 。【適応】 ・ 。【学校】 		
家族				
その他				

【「チーム援助シート」の記載の仕方】

担任が中心となり児童生徒の基本的情報を収集し概要や内的資源を記載する。
チーム援助会議を通して、決まった援助目標、援助方針を記載する。
チーム援助会議で決まった具体的援助案（手立て）、その援助担当者を記載する。
実践後、援助内容と児童生徒や家族等の変容を記載する。
チーム援助会議における児童生徒の変容と援助者の取組の評価・検討を記載する。
チーム援助会議で決まった、次の援助目標や援助方針の修正を記載する。
～ の修正を重ね、円環的な取組と「『個人記録』ファイル」の管理に十分配慮する。

【「チーム援助シート」、「『個人記録』ファイル」の活用の仕方】

週1回チーム援助会議を開き、総合的なアセスメントを図る。
役割ごとに具体的な援助を実施し、ステップごとに評価・検討を記録し、柔軟に援助を修正していく。
長期的な展望については、2～3ヶ月を期限とし、具体的手立てと児童生徒や家族の変容を検討し、修正スモールステップ計画表（プログラム）を再作成していく。

(3) 援助者が連携したスモールステップ計画案作り

家庭訪問を実施し、児童生徒の思いや願い、また、保護者の思いや願いをつかみとり、スモールステップ計画案の達成目標を立案する。児童生徒の不安な要素を事前につかめるとより効果的である。チーム援助会議でのアセスメントを生かして、具体的な援助、資源の活用、役割分担等と、チーム援助の具体的なタイミングを踏まえたスモールステップ計画案を作成する。そして、スモールステップの達成目標を目指しチーム援助を展開する。小さな一つの達成が、変化の契機となる可能性もある。小さなきっかけから、変化が加速度的に展開することもある。

(4) 修正、改善に結び付く評価の仕方（長期的な展望と短期的なスパンで評価する必要性）

チーム構成員が、スモールステップの達成目標を評価、記録し、1週間ごとにチーム援助会議で検討する。また、2～3ヶ月の期限を決め、児童生徒やその周囲の変容、援助者の取組等を評価・検討し、その後のスモールステップ計画案を修正する。

資料3 スモールステップ計画案の捉え方と作成の仕方

【スモールステップ計画案の基本的な捉え方】

児童生徒の思いや願いを基本軸にする。
児童生徒の不安をつかみ、アセスメントに生かす。
児童生徒の思い・願いを踏まえ社会的な自立の実現を目指したスモールステップにする。
社会的自立を目指す過程で、学校復帰の実現の方向性を大切にする。
不安を持つ生徒が実践しやすいように環境整備する。
児童生徒への関わり方、援助の適時性を大切にする。

【スモールステップ計画案の作成の仕方】

児童生徒や保護者の思いや願い、希望と不安となること、できないこと等を聞いたりつかんだりして作成する。
チーム援助構成員等の助言を受けながら、児童生徒の達成目標と援助目標を計画案に盛り込み作成する。
スモールステップ計画表の取組を児童生徒や保護者に伝え、意見を聞き、修正する。
計画案を、職員会議、児童生徒指導部会、学年会等で確認し、チーム援助体制を整える。
スモールステップの達成目標を目指し、援助目標に沿った実践を行う。

(5) スモールステップの取組の例

乗馬の冒険的活動を設定し、事前に、児童生徒の思いや願い、不安をつかみスモールステップで捉え、計画的に児童生徒と援助者の共有場面を設定し、円環的な共有問題解決を図ろうとするプログラムの取組例(図10)である。

チーム援助によるプログラムが、計画的、組織的に展開できると、スモールステップを踏まえた柔軟に再構成する取組も可能で、児童生徒の詳細な「動き」を見取り、励ましたり、賞賛したりすることもできる(次頁資料4)。

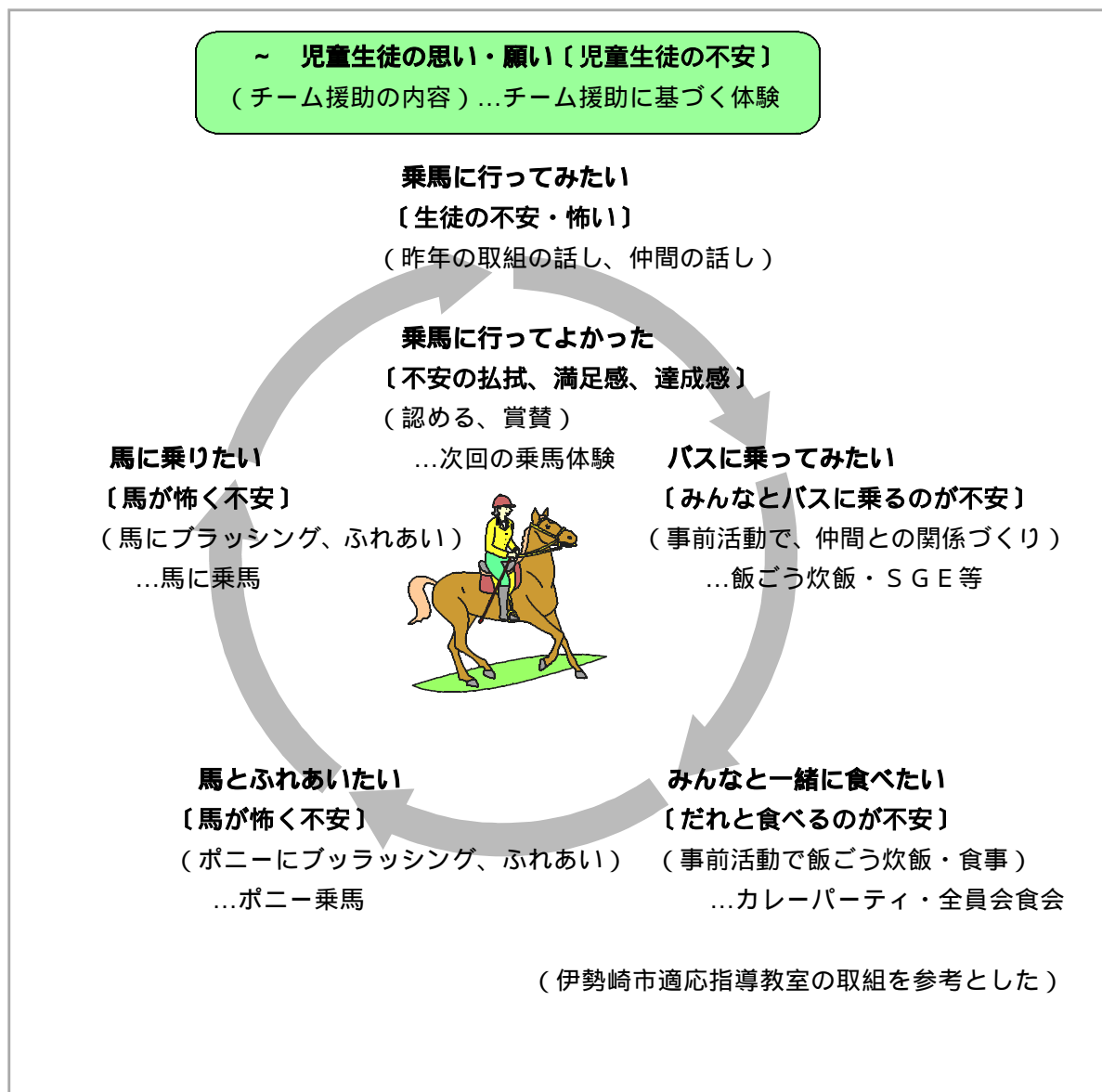


図10 児童生徒の「思い・願い」の実現を目指したプログラム

(6) スモールステップ計画書の例

「合唱コンクールに出たい」という不登校児童生徒の思い・願いの実現を目指す計画書である。援助目標を立て、チーム援助によりそれぞれの立場でスモールステップによる、援助方針と援助内容、役割等を確認し、取組を修正しながら取り組むものである。実態によって、ソーシャルスキルトレーニングもスモールステップ計画書に盛り込んだ(次頁資料4)。

資料4 スモールステップ計画案(学校、家族、適応指導教室と連携)

ス テ ッ プ	達成目標	援助目標：Aの合唱コンクールに出たい思い・願いの実現			
	本人 思い・願い	家 族	学 校【援助の担当者】	適応指導教室	評価
0			Aのアセスメントと援助チームの編成、援助目標と方針の検討【生徒指導部・教育相談部】、電話を掛けたり、家庭訪問を行ったりして、ラポールづくりを心がける【担任】	計画案に助言する	
1	担任に自分の思いや願い、希望を伝える	思いや願い、希望を担任に伝える	家庭訪問を行い生徒や保護者の思い・希望等を聞き、生徒の達成目標をつかむ【担任】、スモールステップ計画の概略を本人、保護者に提案、検討、修正し決定する【担任】	計画を承知できたら、協力する	
2	担任と学校の行事について話せる	学校の行事について話題にする	家庭訪問を行い、学校の話題を出す【担任】、スモールステップ計画案を職員間で周知徹底する【生徒指導部、教育相談部】、学年会で、対応を周知徹底【学年主任】、電話を掛ける【友だち】	学習支援と共に学校の行事を話題にする	
3	友だちが遊びに来たとき会える	友だちに会えたことを喜び、認め、賞賛する	合唱コンクールの練習に級友が待っていることを伝える【担任】、Aの家に遊びに行く【友だち】	学習支援と友だちと会えたことを賞賛する	
4	友だちに自分から電話し、日曜日に遊ぶ約束をする	友だちに電話すること、促し、励ます	通信や合唱コンクールの案内などを渡し、話を【担任】、Aと話を【友だち】	学習支援と友だちと遊べたことを賞賛する	
5	日曜日に友だちと遊ぶことができる	友だちと一緒に遊んだことを認め賞賛する	合唱コンクールで歌うクラスの曲のテープを届ける【担任・友だち】、Aといっしょに遊ぶ【友だち】、学年会で、対応を検討し周知徹底を図る【学年主任】	合唱コンクールを皆で取り組むことの楽しさを話す	
6	家で、合唱コンクールのカードセットテープかけ、歌詞カードを見る	合唱コンクールのテープと一緒に聴き、話題とする	放課後の合唱練習を一緒にやろうと話す【担任・友だち】、合唱コンクールの歌詞を届ける【友だち】、Aの状況を職員に伝え周知徹底を図り登校時の対応を準備する【生徒指導部、教育相談部】	合唱コンクールで、歌う曲を話題にする	
7	学校のほっとルームに行くことができる	登校することを励まし、できたら、賞賛する	ほっとルームで待機し、登校したことを喜び、認め賞賛する【担任・スクールカウンセラー】、ほっとルームに行きAと話を【友だち】、Aの取組を賞賛し励ます【職員】	ほっとルームへ行けたことを賞賛する	
8	ほっとルームで過ごし、放課後の教室で合唱練習に参加できる	ほっとルームで過ごし、教室に行ったことを認め賞賛する	教室で待機し、Aを待つ雰囲気作りをする【担任】、ほっとルームに迎えに行く【友だち】、Aの取組を賞賛し、励ます【職員】	教室で合唱練習参加を前提にソーシャルスキルトレーニング実施	
9	クラスの席の一番後ろに待機し、合唱場面で参加できる	合唱コンクールに両親も参加し、子どもを賞賛する	Aの居場所を確保し、皆で励まし、合唱を見守り、認め、評価する【担任】、皆で歓迎し、認め合う【友だち】、Aの取組を賞賛し、励ます【職員】	ソーシャルスキルトレーニング後、できたことを認め、賞賛する。	

チーム援助会議で、2週間を原則として、取組の経過と児童生徒、家族の変容を評価し、再検討後、スモールステップ計画案や手だてを修正して実施する。

R,Saito

10 学校、適応指導教室、家族（親）が連携したそれぞれの具体的な「動く」取組モデル
「学校が動く」とは、教師が以下のように動くことである。

まず、不登校の児童生徒に目を向け、間にある不登校問題の解決へ向けての認識を持ち、組織的に動くこと。

- ・ 児童生徒と関係性を高めようと動く（ラポールづくり）。
- ・ 児童生徒がいつ登校してもよい学級風土を築こうと動く。
- ・ 児童生徒の学級での居場所が築かれるよう動く。
- ・ 家族や適応指導教室等と連携し、援助チーム編成に向けて動く。
- ・ 児童生徒が多様な形で登校しやすいようにチーム援助体制で動く。
- ・ 児童生徒が別室登校できるように、ほっとルームの設置に動く。
- ・ 児童生徒がいつ登校してもよい学校風土を築こうと動く。
- ・ 児童生徒が毎日、継続的に登校できるように動く。

「適応指導教室が動く」とは、適応指導教室指導員が以下のように動くことである。

まず、児童生徒の学校復帰へ向けて、問題解決のために、多様な支援場所として、動くこと。

- ・ 児童生徒と関係性を高めようと動く（ラポールづくり）。
- ・ 人間関係づくりの力（コミュニケーション能力）の向上のために、小集団の関係性を高めようと動く。
- ・ 児童生徒の学習支援のために動く。
- ・ 児童生徒の自己指導能力の向上のために動く。
- ・ 学校や保護者と連携するために動く。
- ・ 児童生徒を学校復帰に向けチャレンジ登校するよう押し出すよう動く。
- ・ 児童生徒のチャレンジを励まし、賞賛する。
- ・ 児童生徒がソーシャルスキルを獲得するために動く。

「親が動く」とは、親が以下のように動くことである。

まず、児童生徒の学校復帰へ向けての可能性と重要性を認識し、動くこと。

- ・ 児童生徒を理解しようと、目を向け、動く。
- ・ 児童生徒と関係性を高めようと動く。
- ・ 児童生徒のストレスの癒しの場となる家庭風土を築こうと動く。
- ・ 児童生徒のチャレンジのきっかけづくりに動く。
- ・ 児童生徒のチャレンジに目を向け、賞賛する。
- ・ 学校、適応指導教室と連携を組もうと動く。
- ・ 家族の絆に目を向け、より素晴らしい家族づくりに動く。

「子どもが動く」とは、児童生徒が以下のように動くことである。

まず、児童生徒が、自分の思いや願いをみつめ、実現へ向けて動くこと。

- ・ 自らのことを見つめ、考えるようになる。
- ・ 自ら望むことを決めることができるようになる。自分の考えを表出できるようになる。
- ・ 友だちと話すようになり、友だちと遊ぶようになる。
- ・ 先生と話すようになる。
- ・ 将来（進路）について関心を持つ。
- ・ 勉強について関心を持つようになり、勉強を始める。
- ・ 学校のことを気に掛けるようになる。
- ・ 学校へ行ってみたいと思うようになる。
- ・ 学校（ほっとルーム）へ行ってみようとする。
- ・ 学校へ行く。
- ・ 教室に入る。

「組織的『チーム援助』で動く」とは、援助チームの一員として、以下のように動くことである。

まず、学校、適応指導教室、親（家族）等が、バラバラに動くのではなく、同一目標を設定し、連携を取りながら、組織的、計画的に協働態勢で問題解決にあたること。

- ・ 一人の児童生徒のために、皆で関わって援助しようと動く。
- ・ コーディネーターとして、または、援助チームの一員として関わろうと動く。
- ・ チーム援助会議を発足し、自らの立場の特性と生かそうと動く。
- ・ 児童生徒の多面的なアセスメントに資する方法収集のために動く。
- ・ 児童生徒の思いや願いを踏まえ、援助目標や援助方針の設定のために動く。
- ・ 児童生徒の思いや願いを踏まえ、具体的援助案とスモールステップ計画案設定のために動く。
- ・ 具体的援助の役割分担し、連携しながら実践へと動く。
- ・ 実践しながら、児童生徒や家族、周囲の変容をつかもうと動く。
- ・ 児童生徒の変容や自らの取組を評価・検討し、援助案やスモールステップ計画案を修正しながら、次なる援助をするために動く。